

司会：時間も残り少なくなりましたので、まとめながら質問していきたいと思います。スライドの一番最後の、私が書いた Q&A の 4 から 10 のところです。まず、報告書をオープンデータとするにあたり、ライセンスはどこにどう表示すればいいか。これは、報告書の PDF に書いてもいいし、報告書から独立した文書にして、頒布するときに含めるような形にしてもいいということですね。それで、第三者の権利が含まれている場合とか商標があった場合というのは例外規定を設けるといって、例外規定を明記する。例外規定の細かさについては、ざっくりしたものにするのか、総務省みたいに細かく記述していくのか、その 2 通りがありますね。

野口：そうですね。ただ、いま商標についてのお話がありまして、これはちょっと専門的なお話になってしまうのでどこまでお話するか迷うところですけども、少しお話します。商標権というのは基本的に、「このサービスやこの商品はこの人が提供していますよ」という、「出所表示機能」というふうに言われるんですけども、そのサービスや商品の提供元として表示するときにだけ、権利がかかるんですね。で、したがって例えばグーグルでもヤフーでも IPA でもいいんですけども、その名前が商標登録されていたとしても、そういった団体や人について論評をする場合であれば、グーグルと何度書いても、別にそれはサービスの出所表示ではないので、権利はかからないわけです。

同じように例えば、白書とかの図表のところに、例えば「こういう企業さんがこういう技術を採用しています」と言っても、企業ロゴをペタペタペタっと 4 個ぐらい貼ってあると。そういう場合でも、それが客観的に見て白書そのものの出所表示になっていなければ、実商標権で禁止される使用ではないですね。ちょっと専門的なお話になってしまうんですけども。したがって、仮に第三者が商標登録しているロゴなどを入れていても、そのロゴをわざわざ削除したりしなくていい場合もあるんですが、より明確に説明が必要であれば後ほど。

渡辺：引用の場合も、白書をそのまま転用する場合であれば、元の文章に入っている引用もそのままになります。そうするとともに第三者の著作物を合法的に引用していたものが、それをコピー&ペーストした途端に引用にならず違法になるということはあまりないと思うので、そこは実はそんなに心配はいらないかもしれないですね。

ただ、引用にあたらぬ第三者の著作物を単に掲載、転載している場合っていうのもあります。例えば、委託契約をして第三者にコラムを書いてもらったとかような場合、これは元々引用にあたらぬと思いますから、コピー&ペーストした場合は著作権侵害になる可能性があります。そういう場合はちょっと要注意ですね。

司会：著作権のあるものについては要注意という。

野口：そうですね。引用についても、例えば報告書に「以下のような記載がある」と前置きして、行頭をずらして第三者のコンテンツを記載し、それについて地の文で論評をしているような場合はたぶん引用といえる。そうやって、第三者のコンテンツ部分だけではな

く、その前後の論評部分も含めて転載する場合は、合法的な引用の構造が保たれているので大丈夫なんですけれども、引用している部分だけ取ってきて、全然前後の論評とか関係なくコピペするっていうふうになると、それは元々の引用の文脈から完全に切り離されてしまうので、そういった場合はもはや引用にはあたらなくなってしまう。あまり細かいところに入っていくとだんだん複雑になってくるんですが、そういう違いがあります。

司会：わたくしどもの白書などの中には、数値データは発表してないけれども、グラフとして発表してあるものがあります。で、そういうものをオープンデータ化したときに、例えばそのグラフを、定規で数値を測って、それを数値化して別のものに使うということに対しては、何かしら制約は存在するのでしょうか。

渡辺：定規で測る。

司会：はい。

渡辺：その場合は制約はないと思いますね。著作物を利用しても、著作物を何か活用して別のものを作るときに、それが必ず著作権に関わるかっていうとそうではないですね。例えば IPA さんの報告書をいくつか取り出して、報告書別の経年変化として、「情報」という単語がどのくらい出てくるか、新たにグラフにプロットするというようなことを考えてみると、これはテキスト解析を伴いますけれども、単にカウントするだけですから、何かその基のコンテンツにある著作物、つまり思想や感情の創作的な表現と呼べるようなものをコピーするとか、そういったことは起こってないわけですね。

司会：はい。

渡辺：そういう場合であれば、ライセンスの規定にかかわらず自由にできます。文字数をカウントするとかもそうですね。

野口：いま想定されているのは、もっと端的にグラフ化されている数値ですよ。数値の例えは、仮にブロードバンド普及率としましょう。ブロードバンド普及率みたいなものを数字だけ抜き出してきて全然違うグラフにするとか、その数字だけを使うことは、基本的にはこのライセンス云々にかかわらずもともと著作権法として制限をされていない行為です。ただ、あんまりタダ乗りされるというもの、気持ちいいものではないので、例えば IPA のデータを使いましたっていうのをできるだけ表記してくださいっていうふうに皆さんにお願いをするということかと思います。

司会：ありがとうございます。で、私たちのデータは先ほど報告書の類が多いということと言ったのですが、その報告書などでお薦めのライセンス。これを見て提示していただくと、わたくしどもとしてはとてもやりやすくなります。こうすればいい、このライセンスだったら良いんじゃないの、というのはありますか。理由とともにお教えしていただくと。

渡辺：そうですね。ライセンスを選ぶ方々それぞれの事情があるんですけれども、非常に一般的に言うと、重要なのは利用者の便宜を計ることです。すると、制約条件は少なければ少ないほどいいです。ということは、一番いいのは全部パブリックドメインにしていしま

うことです。このためのツールとして、ライセンスとはちょっと違うんですけども、クリエイティブ・コモンズで提供している「CC0」という仕組みがあります。日本語版がもう少しで完成で、今はまだ英語なのでちょっと使いづらいかもしれませんが、あえて1つ挙げるということで言えば、CC0を選ぶのが利用者にとっては一番快適な環境といえるでしょう。

司会：CC0 にしてしまうと「わたくしどもの著作物ですよ」と主張する権利もすべて放棄しちゃうことになるんでしょうか。

渡辺：基本はそうです。ただ日本の法律上は、ちょっと細かい話になるんですが、著作権の中に放棄できないと言われる権利が一部あるんですね。著作権者人格権と言うんですが。その部分についてはCC0を使っても放棄されるということにはなりません。ただ、CC0の規定を見ると次のように書いてあります。「放棄できるものは一切放棄します」「放棄できないものについては無条件で誰でも自由に使えるように許諾を与えます」というふうに書いてありますので、それが適用されて、自由に使えることになっています。

野口：そう言いつつ、現状では総務省さん、経済産業省さんが一番数として多く採用しているのはCCの「表示」ライセンスですね。

渡辺：CC-BY。

野口：CC-BYですね。この「表示」ライセンスというのは、商業利用もできます。改変もできます。ただし必ず出典を表記してください、著作権は放棄しないで持っているんだけど、できるだけ広く自由に使ってください、というものです。CC0がベストだとするとCC-BY、「表示」ライセンスがたぶんセカンドベストです。もっとも利用者に優しいのは放棄でしょう。元々の権利者のほうも、放棄してしまえば、いろいろな問い合わせやわずらわしさから解放されるという意味で一番実は気楽ではあります。けれども、いろんな理由でそこまで大胆には行けないという場合のセカンドベストの選択肢としては、CC-BY、「表示」ライセンスがいいのかなと。手前味噌になってしまうので言いにくいところもありますが、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスがやっぱりワールドワイドでも今一番標準的に広く使われているライセンスの1つかなあとと思いますので。

司会：バージョン的にはどうですか。

野口：バージョン4.0が出ればそれを日本に対応して4.0JPにするのがいいでしょう。今は日本では2.1JPを採用される例が、官公庁さんでは一番多いのかなあと。やっぱり日本語で書いてあって分かりやすいというのが一番の理由かなと思います。

司会：なるほど。報告書の話はわかりました。で、わたくしどものほうでは、報告書以外にも、ロウデータとか、データベース系のデータが一部ありまして、そちらのほうのライセンスとしてはどうでしょうか。

東：私もどっちかっていうと渡辺さんのおっしゃることに賛成です。CC0は、パブリックドメインと、一言で言うとそういうことなんです。先ほど議論になっていた、日本では法の狭間に落ちこちてしまう「事実情報としてのデータ」をもカバーすると言われていま

す。著作物もちろんパブリックドメインだし、それもデータであろうが何であろうがパブリックドメインっていう制限っていうことになるので、CC0 をつけるとたぶんいちばん悩まなくて済むという意味で、わたしは CC0 を支持します。とはいえ、CC ライセンスも、バージョン 4 になると、「データ」についても、特にヨーロッパ系のデータベース権についての扱いもちちゃんと書かれるようになるようですし、CC-BY をお使いなら、バージョン 4 になると、すっきりするのかなあ、という気はいたします。

司会：CC ライセンスのバージョン 4 はいつぐらいにリリースされる予定なんですか。

渡辺：ファイナルバージョンは、もう 1 ヶ月しないうちに出てくるんじゃないかと思いますが、それはまだ英語なんです。日本語化する作業というのはそこから始まるので、ちょっと先にはなってしまうております。おそらく IPA さんのオープンデータプロジェクトでは、バージョン 4 を待てないと思うので、まずは CC-BY2.1 か CC0 がいいんじゃないかなあと思います。

司会：分かりました。すると質問 7 なんですが、アンケートデータみたいなロウデータについても CC-BY のほうがよろしいでしょうか。

野口：はい。先ほどデータそのもの、事実そのものには著作権がないというお話をしまして、その一方で、データをどういう着眼点で集めて、どういうふうにデータベース化しているかに創作性が認められれば、その体系に著作権が発生する場合があるというお話があったと思います。ここが、データを扱うときにはすごく難しいというか、分かりにくいところですね。

わたくしがいつもお話をするのは、例えば「こういう観点でデータを集めてデータベースを作ってください」と言って、10 人あるいは 100 人に依頼したときに、その上がってくる成果が 10 通りあるいは、100 通りあるというような多様性がある場合には、そのデータベースのそれぞれに著作権があるという形になります、ということです。例えば直感的に分かりやすい例ですと、例えば「東京都のレストランベスト 100」というデータのリストを作ってくださいという依頼をすると、たぶん依頼を受けた方の好みによってどれがベスト 100 かは全然変わってくると思うので、人によって全く違う結果が出てくると思うんですね。そういうデータベースには着眼点もありますし、データとして何を入れるかという点でも、「レストランベスト 100」なら普通、名前と住所と電話番号ぐらいはみんな入れるとは思いますが、でも、「なぜそういうふうを選んだか」といった、理由まで含めれば、たぶんすごく多様性が出てくると思うので、その 1 つ 1 つに著作物性があるということになるかと思っています。

で、その一方で例えば会場近くの千石駅から 500 メーター以内のすべてのレストランを挙げてデータベースみたいにしたいと言っていると、もしちゃんと調べられれば、100 人が 100 人同じ結果にならないとおかしいですね。そういうふうに 10 人なり 100 人がやって全部同じ結果になるようなものは、もともと事実そのものであって著作権がないと言われてます。ですから、まずそれを迷ったときには 1 つの指標にしていいただければと思います。

「データベースのジレンマ」とも言われるんですけれども、非常に作爲的な視点が入っていたりとか、不完全なデータベースであればあるほど著作物性があるって、一方で完璧で何もかも全部入っている完全なデータベースに近づけば近づくほど、100 人オーダーかければ 100 人同じ結果にならないとおかしいわけであって、完璧なデータベースであればあるほど著作物性がなくなっていくというジレンマがあると言われています。

ヨーロッパで、いわゆるデータベース権というものを作りましたが、政策的には非常に悪法だったという評判になっています。日本法での解釈という意味では、まず出発点として、「データが、もともと著作物性のあるものか、ないものか」というところがあるかと思えます。「アンケートデータ」を例にとると、例えば今日お願いしているアンケートでもそうなのですけれども、「どういう項目を選び、どういう情報を得るか」という点からして、たぶん 5 人、10 人に頼むとそれぞれ違う内容になる部分もあると思います。その意味で、もともと著作物性がないデータベースというのはあまりないかもしれません。次に一歩進んで、利用者がこのデータベースを丸々コピー&ペーストするのであれば著作権が及んでいるのですけれども、例えば先ほどの「レストランベスト 100」の例で、丸々データベースを使いたいわけではなく、名前と住所と電話番号といった事実そのもののところだけを抜き出して利用者のマッピングサービスに使いたい場合を想定すると、抜き出し方によっては、もともとの選択配列が失われてしまうような利用もあります。そうするとそれはもう著作権が及ばないデータの利用ということになってしまうので、入り込んで行くと非常に分かりにくい面もあるのですけれども。

司会：そのへんはケース・バイ・ケースということわかりました。先へ進みたいと思います。質問の 8 ですが、オープン化したデータの使用者から不利益を被ったらどうなるか。これは自分の名前を消させる手続きや、自分たちに不利益が被らないような項目が CC の中にあるので、ある程度は大丈夫だという理解でよろしいでしょうか。

渡辺：少し付け足しますが、「自由に使わせる」といっても、「どんな使われ方をしても提供側は非難しない」ということではないですね。だから、ライセンスしていようとまいと、著作権上は問題のない使い方であっても、提供側が「我々の見解から見るとこの人のデータのプレゼンテーションの仕方は明らかに歪曲があります」と主張することはできます。プレスリリースを出そうが、メディアにたいしてインタビューに答えようが、それは自由なわけですね。なので、法的に縛るのではなくて言論で戦うということ是可以するわけです。

司会：ありがとうございます。では質問の 9、ライセンスを後から変更したいと。ライセンスをあとから変更する必要がある場合はどこに気をつける必要があるでしょうか。

渡辺：第三者の権利物を処理する際に気をつけなきゃいけないところがあります。権利処理の際に第三者に対して「あなたからいただくものはクリエイティブ・コモンズの CC-BY2.1JP で活用させていただきます、あるいはリリースさせていただきますので、よろしく」と言って承諾を得てしまうと、ライセンスのバージョンを 4.0 に変えたいという

きに、もう 1 回その人たちに連絡して許諾を取り直さなきゃいけなくなります。なので、そこはある程度幅を持たせた許諾をもらっておくとか、権利ごと譲渡を受けておくとか、ちょっと工夫をしておく必要があって、特定のライセンスのみの許諾でやってしまうと、あとから利用できなくなってしまうところが注意点の 1 つ目です。そのほか、ライセンスについては一般的に言えることですが、いったん特定のライセンスで提供した著作物で、それを受け取って利用している人がいた場合は、その後で提供者が、例えば IPA さんがバージョン 2.1 からバージョン 4.0 に変えた場合でも、2.1 で受け取っていた利用者は 2.1 の条件で使い続けることができます。提供側がバージョンを変えた後に、さかのぼってライセンスの条件を変えることはできないんですね。ただ、そのようにすでにいる利用者との関係を除けば、基本的には提供する側、権利者の側の意向でライセンスを提供するのをやめたり、別のライセンスに切り替えたりということはできます。

野口：あと、著作権人格権を放棄せずに保持したまま、あるライセンスから別のライセンスに変えるのは問題ないんですけども、著作権人格権も放棄すると宣言してパブリックドメインとする、例えば一度 CC0 をつけて放棄した後に、「やっぱり放棄はやめました、CC-BY に変えます」というのはどうなのかという問題があります。

渡辺：人格権は一応残っているからね。

野口：でも、「権利を一度放棄したものがまた戻ってくるのか」というところは、若干法律的には難しい問題はあるのかなあと思います。

渡辺：まったく放棄、全部放棄されていればもう切り替えるも何もできないですけど、人格権は放棄すると宣言してもまだ残っているわけですね。パブリックライセンスをしているだけなので。

野口：そうですね。著作財産権のところは別のライセンスにつけ替えても問題ないのかもしれないのですが、逆に一度パブリックドメインに放棄した後で、そのデータを利用することに権利を及ぼすのは難しい気がします。

司会：最後の質問ですけども、10 番目。新たに作成するデータまたは資料でオープンデータ化するための注意点。第三者の著作物で引用以外の場合にはあらかじめオープンデータ化をするということを相手方に許諾してもらうということが重要であるという理解。引用以外のところですね。東さん、お持ちいただいた資料についてコメントをいただけますか。今後どういうふうに使ったらいいとか。

東：はい。そうですね。わたくしども、もともとライセンスに足を突っ込んだきっかけは「オープンストリートマップ」という自由な地図を作ろうというプロジェクトでした。つまりデータについてのオープン化のプロジェクトでしたが、そこにはじめ CC-BY-SA というライセンスを付けましたが、行き詰まって、ODbL という、オープンデータ・コモンズという組織のライセンスに切り替えました。その経緯を資料に書かせていただいております。

わたしも役割としてオープンデータ・コモンズの組織の事務局長なもんですから、この

ライセンス、ODbL というデータのライセンスを一生懸命理解して普及させなきゃいけないということで、頑張っております。

先ほどの渡辺さんのプレゼンにありましたが、やはりライセンスの中身がわからないものは、利用者の立場からは怖くてなかなか使えないんですね。ODbL とか ODC-By という、オープンデータ・コモンズが作ったライセンスは、正直言って日本では解釈してくれる人とか法的なすり合わせとかしてくださる方があまりいらっしゃらない。わたしも弁護士さんとか知り合いがいないものですから、あまり突っ込んだ話をしたことがございません。

そういう意味で、データのことはよく考えてあるいいライセンスだとは思いうのですけれども、なかなか実際に日本の著作権法と照らしてどうなのとか、その整合性の解釈がまだ不足しているところがございます。我々のプロジェクトはヨーロッパがメインなのでそちらのプロジェクトで使うのはいいと思うのですが、日本の中で独自にオープンデータ・コモンズのライセンスを設定するというのは、よく勉強をしてから設定をすべきものかなあと、最近では思っております。そういう意味でわたしも今はオープンデータに相応しいライセンスを取り上げるときに CC-BY、クリエイティブ・コモンズさんのライセンスを最初に取り上げるのがいいかなと思っております。できれば CC0 がいいかなというところですね。

司会：ありがとうございます。では、本日先生方、長い間ありがとうございました。これで勉強会を終わらせていただきます。